みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Socio-Economic Significance of Salmon among the Aboriginal People of the Northwest Coast of Canada : A Case Study of Contemporary Kawakwaka'wakw Economic Activities

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 立川, 陽仁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004004

国立民族学博物館研究報告29(2): 307-352 (2004)

カナダの北西海岸先住民にとっての サケの社会･経済的な意義
──現代のクワクワカワクゥ漁師の経済活動に関する事例から──

立　川　陽　仁*

Socio-Economic Significance of Salmon among the Aboriginal People of the Northwest Coast of Canada: A Case Study of Contemporary Kwakwaka'wakw Economic Activities

Akihito Tachikawa

「カナダの北西海岸の先住民族にとってサケは現在でも不可欠な資源である」という語りは，当の先住民集団だけでなく，先住民社会を外側から観察する人々ないし組織──カナダ政府，マスメディア，人類学者など──からもしばしば主張されている。この主張には，先住民の日常生活に則した社会・経済的側面におけるサケの意義を指摘するものもあれば，彼らの宗教・象徴的側面でのサケの位置づけを説明するものもある。

このうち社会・経済的側面におけるサケの価値に関する説明には，統計上の実証的裏づけが必然的に求められるものである。しかし皮肉なことに，先住民にせよ彼らを外側から観察する人々にせよ，こうした実証的検証を放棄し，そして先住民外部は先住民自身による語りを単に表層的に捉えてきたのである。

こうした状況をふまえ，本稿ではまず，筆者が北西海岸の先住民族，クワクワカワクゥ社会において実施したフィールドワークをもとに，そこで得られた経済活動に関するデータを提示し，つぎにクワクワカワクゥの社会・経済的側面におけるサケの意義を検討する。そして最後に，言説レベルでのサケの意義に関する説明とフィールドワークで観察される状況（および収集されたデータの分析）と対比させる。これらの作業から，両者にはずれがあること，語りのなかでサケは生業（漁撈）の領域で強調されているが，フィールドワークの観察からはむしろ北西海岸先住民が100年以上にわたって関わってきた──そし

*三重大学人文学部

Key Words：Kwakwaka'wakw, salmon, commercial fishery, food fishery, crew group
キーワード：クワクワカワクゥ，サケ，漁業，漁撈，クルー集団

て語りでは軽視されてきた――サケの商業捕獲（漁業）の領域においてサケの重要性が指摘できることが理解されるはずである。

There is a narrative that salmon is a necessary resource for the aboriginal peoples of the Northwest Coast of Canada. This narrative has often been stressed, not only among the aboriginal societies themselves but also by those who observe them from outside, such as the Canadian government, the mass media and anthropologists. Generally, this narrative includes explanations of the significance of salmon in relation to two dimensions: the socio-economic dimension, which involves their routines and daily lives, and the religious-symbolic dimension.

Although explanations concerning the former dimension necessarily require statistical empirical evidence, both the aboriginal peoples themselves and outsiders abstain from using such procedures, and the latter seem to recognize only the surface of the narrative of the aboriginal peoples.

Under these conditions, this article aims first to shed light on the data collected during the author's fieldwork among the Kwakwaka'wakw, one of the aboriginal peoples of the Northwest Coast, then to examine the significance of salmon in the socio-economic dimension from the field data, and to compare the result to the narratives on the significance of salmon. Readers will see from this that there is an explanatory gap between the narratives and the field-data analysis, that the former emphasizes the significance of salmon in the domain of subsistence (food fishery), while the latter points out the significance in the domain of commercial fishery, in which aboriginal people of the area have been engaged for over 100 years (and which has been somewhat ignored in the narratives).

1　はじめに
2　漁民コミュニティとしてのクワクワカワクゥ社会とそれを取り巻く環境
2.1　クワクワカワクゥという民族
2.2　サケ漁業と漁撈をめぐる政策
2.3　現代の漁業漁師の位置づけ
2.4　年間の活動パターン
3　漁業
3.1　漁法
3.2　クルー集団の構成とその特徴
3.3　クルーの雇用── A の漁船のサケ漁業操業
3.4　収入
4　オフシーズンの活動──漁撈とその他の活動
4.1　生業活動
4.1.1　捕獲
4.1.2　分配
4.1.3　消費
4.2　その他の経済活動
5　考察──社会・経済的側面におけるサケの位置づけ
5.1　説明されるサケおよびサケ漁の意義──社会・経済的側面
5.2　検討
5.2.1　消費
5.2.2　分配
5.2.3　捕獲
5.3　サケとサケ漁の意義に関する考察──サケ漁業から
5.3.1　経済的意義
5.3.2　社会的意義
6　終わりに

1　はじめに

本稿の目的は，カナダの太平洋沿岸部（以下，北西海岸）を生活圏とする先住民，クワクワカワクゥ（Kwakwaka'wakw，かつての Kwakiutl）にとっての現代におけるサケの社会・経済的な意義を論じることである。この目的に対し，本稿では次の 3 つの具体的な作業をおこなう。第一の作業は，クワクワカワクゥ漁師の現代における経済活動のデータをできるだけ詳細に提示することである。つぎに，こうして提示された経済活動のデータを元に，これまでの数多くの言説における「クワクワカワクゥにとってのサケの意義」に関する説明を再検討する。この作業から，サケの意義をめぐる言説上の説明と実証的分析成果には，ずれがあることが理解されるだろう。そして第三の作業は，言説においては強調されることがなかったが実証的な議論から「新たに」浮かび上がってくるサケの意義を指摘することである。

マスメディア，カナダ政府，環境団体，人類学など，先住民社会を外側から観察する人々（ないし組織）のあいだでは，クワクワカワクゥをはじめとする北西海岸先住民にとってのサケ，およびその捕獲活動としてのサケ漁の現代における重要性がしばしば強調されてきた。たとえばアンダーソンや岩崎などの人類学者は，これらの先住民を「サケの民」と呼び，サケとサケ漁が今でも先住民の生き様（あるいは生きる術）だと説明する（Anderson 1986; 岩崎 2002）。また，1990 年以降カナダ政府は先住民の食糧獲得とその他の社会的目的のためのサケ漁撈を保護する諸法を整備しているが（Canada 2000: 14–15, 23–24），この姿勢も先住民の食生活におけるサケの重要性を認める態度の表れだと理解できるだろう。人類学者やカナダ政府が認識するこうしたサケとサケ漁の重要性は，いわば先住民の日常生活に根ざした社会・経済的側面におけるものとみなせるが，他方で宗教・象徴的側面における重要性も強調されている。たとえば人類学者モリスは，サケを――同化政策の結果――失われてしまった伝統の回復に不可欠な文化的指標と位置づけると同時に，サケ漁を土地との関わりを実感できる行為とみなしている（Morris 1994: 151）。

しかし実をいえば，こうした説明および態度には実証的立場からの数量的検証が欠落していることが多い。つまり政府にせよ，みずからのデータの多くを参与観察に依存するはずの人類学者にせよ，先住民の居留地（reserve）においてサケの捕獲，消費，分配の在り方を検証することによって，みずからの説明を裏づけていることはほとんどなかったのである[1)]。先住民を外側から観察する人々の語る，先住民社会でのサケおよびサケ漁の意義は，なるほど先住民自身による語りの内容とほぼ一致する。しかし考え方によっては，先住民がみずからの理想像を語りに反映させた結果，事実とは異なる主張をしている――そしてそれを政府や人類学者はそれを鵜呑みにしている――可能性もあるし，先住民を外側から観察する人々も――スチュアート（1996: 125）がイヌイト（Inuit）社会における狩猟の意義を再検討する際自省的に述べたように――自社会の理想を先住民という他者に投影しようとしたにすぎない可能性もあるだろう。

こういった批判の可能性を具体的に北西海岸先住民とサケの関係に当てはめ，明るみに出したのがフライデーである。フライデーはまず，北西海岸先住民に対するサケの重要性が先住民内外から叫ばれているが，はたして本当にサケは現在でも先住民の主要食糧なのか，また彼らの観念世界において中心的な役割を果たす超自然的存在なのかと問う。そして先住民にとってのサケの位置づけが今まで過剰に評価されてきた可能性を示唆し，これまでのサケの意義に関する主張の真偽を再検討するべきだと説

く（Friday 2000: viii）。ただし，フライデーは先住民による語りと実態のずれについて若干言及したにすぎない。つまり，実証的見地にたった数量的検証は，いまだなされていないのである。

以上のような研究の動向をふまえると，冒頭で提示した3つの作業の意義が明確に理解されるだろう。すなわち，昨今のクワクワカワクゥの人類学史を考慮すれば，現代における彼らの民族誌的資料を提示することはそれ自体に価値があると考えられる。さらに，サケの意義に関する言説上の説明に疑問が付されるようになった現状において，言説上の説明を民族誌的データから再検討することは不可欠であり，その上で改めてサケの意義を議論しなければならないからである。なお，本稿では，議論の対象を日常生活に即した社会・経済的側面に限定することにした。宗教・象徴的側面におけるサケの意義については，別の機会に論じることにしたい。

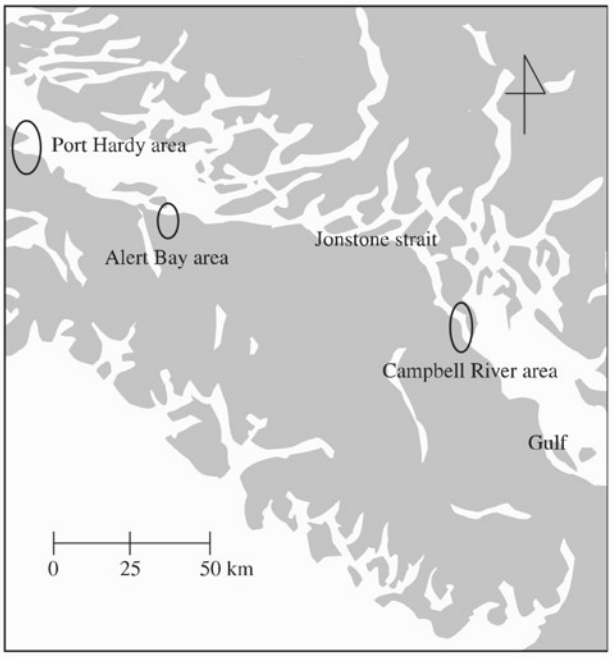
本稿は以下のように構成されている。まず，次節にてクワクワカワクゥという民族，同社会における漁師の位置づけ，国家の漁業および漁撈[2] 政策について概観し，ついで3節から4節にかけて，現代（おもに1990年以後）のクワクワカワクゥの経済活動を，おもに筆者のフィールドデータから記述していく。

次節の論述から理解される点の1つは，現代のクワクワカワクゥ漁師の1年が，ニシンとサケを対象とした漁業シーズンを軸として営まれ，そのオフシーズンに漁撈やその他の賃金労働がおこなわれることである。そこで3節では，まず彼らの生活の軸となる漁業操業について論じていく。ここに提示される彼らの操業上の戦略や漁業収入に関するデータは，いかに先住民漁師が漁撈との技術的な断絶や先住民の漁業参入に対する歴史的な圧力を乗り越えようとしてきたかを知る上で，有益な示唆になるはずである。

漁業以外の経済活動は，生業（漁撈）と漁業以外の賃金労働に大別できるが，4節ではこれら2つの活動について論じていく。生業に関しては，漁撈活動の消費・分配・捕獲という3つの過程ごとに記述する（現在クワクワカワクゥは漁撈以外の生業活動にほとんど従事しない）。他方で，漁業以外の賃金労働に関しては，1990年代以降クワクワカワクゥにとってオフシーズンの中心的な活動となりつつある養殖場労働に焦点をあてていく。

これらの経済活動に関する記述をふまえ，5節ではクワクワカワクゥ社会におけるサケとサケ漁の社会・経済的意義を考察し，語りにおける同様の意義と対比させる。はじめに，語りにおいて，現代のクワクワカワクゥの社会・経済的側面におけるサケの意義がいかに説明されるのかという点を整理する。この作業から浮き彫りになるこ

との 1 つは，語りにおいては，サケおよびサケ漁の意義がおもに漁業ではなく生業（漁撈）の領域にこそあるのだという論調が強く確認されることである（詳しくは 5.1）。そこで，続く 5 節の諸項（5.2，5.3）では，漁撈に重きを置くこの言説を，4 節まで論じてきた参与観察にもとづくデータと対照させていく。これらの作業によって，フライデーが示唆するにとどめたサケの意義をめぐる両者のあいだのずれは，ある程度実証的に例証できるものと思われる。



地図 1　クワクワカワクゥ居住テリトリー

なお，本稿で利用されるフィールドデータは，おもに筆者自身が収集したものである。筆者は，1999 年 4 月から 6 月までの 3 か月間，2000 年 1 月から 2001 年 1 月までの 12 か月間，2003 年の 10 月から 2 か月間の計 17 か月間フィールドワークをおこなっている。2000 年のフィールドワーク以降，筆者はキャンベル・リバー（Campbell River，地図 1）に住むあるクワクワカワクゥ漁師（以下，A）の家に下宿し，彼らの漁業，漁撈およびオフシーズン時の養殖場での労働を参与観察した。したがって本稿のデータは，おもに A および彼とともに働く漁師たちの活動に関するものである[3)]。

2　漁民コミュニティとしてのクワクワカワクゥ社会とそれを取り巻く環境

2.1　クワクワカワクゥという民族

クワクワカワクゥは，カナダのブリティッシュ・コロンビア州（以下，B.C. 州），バンクーバー島の北東部ならびにジョンストン海峡を隔てた大陸側を生活圏としてき

た先住民族集団である（地図 1）。ヨーロッパ人との接触に関する最初の文字史料がある 18 世紀後半のクワクワカワクゥの人口は，約 19,000 人と推測される（Boyd 1990: 136–144）。天然痘などの疫病の蔓延により，人口は 1835 年頃には約 8,500 人，20 世紀初頭には 1,000 人強にまで落ち込んだが（Galois 1994: 40–41），以後は増加に転じ，現在では約 5,000 人にまで回復している（Canada 1990: 92）。

伝統的に[4]，クワクワカワクゥは双方的原理に基づいたヌマイム（*Numaym*，ナミマ *Namima* とも表記）という親族集団を組織し，また冬になると複数のヌマイムが集住して「トライブ」と呼ばれる地縁集団を形成した（立川 1999: 4）。これらの集団はともに，ポトラッチなどの饗宴をとりおこなうユニットとしてだけでなく，生業ユニットとしても機能していた（立川 1999; 2002a: 88–89）。ボアズによれば，1880 年代のクワクワカワクゥには 28 の「トライブ」があり，各「トライブ」には 4 から 6 のヌマイムが存在した（Boas 1966: 38–41）。他方で，クワクワカワクゥには社会を水平に分断するランクシステムも存在しており，ヌマイムの成員はそれぞれが持つ固有の名称・特権を備えた「ランク」ごとに，首長を頂点に 1 人 1 人序列化された。さらに，このシステムはヌマイムを横断し，「トライブ」内の各ヌマイム，またクワクワカワクゥ内の各「トライブ」をも序列化した（Drucker 1939; Donald and Mitchell 1975; 立川 1999: 4–6, 16）。

現在のクワクワカワクゥは，カナダの先住民行政において 14 または 17 のネーション（あるいはバンド）と呼ばれる政治的ユニットに分割されている[5]（Canada 1990: 87–92; Muckle 1998: 119）。各ネーションには，過去に居住していた，あるいは生業に利用していたという証言をもとに居留地が配分されている。つまり，ネーションとは必ずしもカナダ政府が近代的先住民政策のために無造作に境界画定したようなユニットではなく，かつての「トライブ」をもとに構成されているのである（cf. Galois 1994）。ただし，これらの人口が必ずしもみずからの居留地に住んでいるというわけではなく，バンクーバー島南部のナナイモ（Nanaimo）やビクトリアといった都市部に出稼ぎに出たごく一部の人口をのぞけば，現在ほぼすべての人口はポート・ハーディ（Port Hardy，フォート・ルパート Fort Rupert を含む），アラート・ベイ（Alert Bay，ポート・マクニール Port McNeill を含む），キャンベル・リバー（ケープ・マッジ Cape Mudge を含む）という 3 つの市町村に住んでいる（地図 1）。つまり，これらの市町村には，そこをみずからの居留地とする人口と，親戚・姻戚関係を通じてそこを間借りしている人口がいることになる。

伝統的に，水産資源はクワクワカワクゥの経済活動において重要な役割を果たして

きた。漁撈は狩猟や採集より優先されただけでなく，その活動時間は生業に費やされる時間全体の過半数を占めた（Mitchell and Donald 1988: 305–306; 立川 2002a: 84–86）。なかでもサケは，毎年夏から秋にかけて捕獲され（Assu with Inglis 1989: 21, 25–30），1 年を通して消費された。その意味で，伝統的時代に限れば，サケが主要食糧であったことは明白である（cf. 渡部 1997: 表 1）。

クワクワカワクゥは漁撈を中心とした生業活動に従事してきた一方で，1880 年代からは同時に商業捕獲を目的とするサケ漁業と缶詰業にも携わるようになった。一般的に，男性は漁師としてサケを捕獲して工場に運び，女性は運ばれたサケを工場で缶詰に加工するというふうに，性別に基づく分業がおこなわれていた。漁業の捕獲対象となったのは太平洋の 5 種のサケ類――ベニザケ（sockeye），シロザケ（chum），ギンザケ（coho），カラフトマス（pink），マスノスケ（spring）――であり，当初これらは刺し網で捕獲されたが（Knight 1996: chap. 9），1920 年代からはまき網でも捕獲されるようになった（Assu with Inglis 1989: 64）。1968 年にはじまるいわゆる「デービス・プラン」（Davis Plan，漁業における漁船の大型化と重装備化，加工業における工場の大型化と集約化を推進する政策）により，バンクーバー島北部の小規模な加工場は閉鎖に追い込まれ，工場労働者である女性の大半は職を失ったが（Newell 1993: 127, 133–134），漁師である男性は，刺し網からまき網に乗り換えたり，あるいはそのまき網漁船のクルーになったりすることで，現在にいたるまで漁業との関係を維持してきた。

あくまでサケを商業捕獲の第一の対象としながらも，クワクワカワクゥ漁師は 1920 年代以後，平行して春のニシン漁業にも携わってきた。これには，先述の先住民に対するまき網使用の許可が大きく影響している。まき網という漁法はカナダ政府によってサケとニシン両方の捕獲に許可されていたからである。ニシン漁業は 1960 年頃に一度閉鎖されたものの，1970 年代には日本への輸出用にその卵巣（数の子）を捕獲対象にしたことで再び活性化された（Canada 1974: 18）。そのほかの商業捕獲の対象資源としては，オヒョウとハマグリが 1960 年代におけるギルフォード島民の漁業操業の対象としてあげられている（Rohner 1967: 48–54）。しかし現在では，まき網漁船を所有する多くのクワクワカワクゥ漁師が夏のサケ漁業と春のニシン漁業を経済活動の軸にしており，それ以外の資源を対象とした漁業にはほとんど従事しない。

2.2　サケ漁業と漁撈をめぐる政策

サケ漁業が導入された 19 世紀後半，北西海岸のどの地域においても先住民は貴重

な労働力であった。20 世紀に入ると，フレーザー川（Fraser, B.C. 州とアメリカ，ワシントン州の国境を流れる河川）やスキーナ川（Skeena, B.C. 州北部，プリンス・ルパートの南方に流れる河川）周辺ではヨーロッパ系カナダ人や日本人労働者の増加に伴い，先住民の漁師および工場労働者は次第に周縁に追いやられた（Newell 1993: 83–85）。しかしおもにクワクワカワクゥが働くことになったアラート・ベイやリバーズ・インレット（Rivers Inlet，地図 2 参照）などの工場では，日本人の流入が最小限に抑えられたこともあり，20 世紀に入ってからも先住民の労働力は珍重された。

一般に，先住民労働者の雇用は缶詰工場側が任命したリクルーター（彼ら自身先住民である）を通してなされた。リクルーターは各居留地に最低 1 人はいたようであり（Knight 1996: 180），また自身がリクルーターであったアスーの述べるところから察すると，自身と血縁あるいは地縁を通して結びつく人々をまとめて雇用する傾向にあった（Assu with Inglis 1989: 62–63）。

1922 年，クワクワカワクゥ漁師にもまき網が許可されるようになった（Assu with Inglis 1989: 64）。これを機に，それまで（工場が所有する漁船の）雇われ船長であった人々が次々とみずからの漁船を購入していく（Assu with Inglis 1989: chap.5; Spradley 1969: 97–98, 105, 117–121）。こうして自身のまき網漁船で操業するようになったクワクワカワクゥ漁師たちは，クルーの雇用や操業する時空間の決定に関してより大きな裁量を得るようになった（立川 2002b: 129）。

総じていえば，20 世紀を通じて先住民によるサケ漁業への参入は政策上優遇されてきたといえるだろう。さらにフレーザーやスキーナ川周辺と比べると，ジョンストン海峡は操業規制――たとえば漁具，操業時間に関して――が緩く，また日本人労働者の流入も少なかったこともあって，クワクワカワクゥの漁業への参入は他の地域よりいっそう順調に進んだ。しかし，サケ資源の減少と漁業の不振に対処する目的で政府が発表した 1968 年のデービス・プランは，間接的に先住民の漁師と工場労働者たちを圧迫しはじめた。デービス・プランが女性の工場労働者を失職に追い込み，男性の漁師たちに膨大な経済的負担を迫ったのはすでに述べた通りであるが，ローナーの民族誌（Rohner 1967）に窺える 1960 年代の漁師の生活や，1990 年頃のいまだ高い漁師就業率（次項参照）から察するに，クワクワカワクゥの漁師たちはこの危機をなんとか乗り越えたと解釈していいだろう。

少なくとも政策の上で先住民のサケ漁業への参入が比較的優遇されていたのに対し，先住民のサケ漁撈はつねに大きな制約を受けてきた。まず，19 世紀後半から 20 世紀にかけて政府が居留地を確定する過程において，伝統的な漁場の多くは居留地か

ら除外された（Newell 1993: 58, 88）。政府はさらに，河川での漁撈を全面的に禁止するか，そうでなければ漁具を制限するようになり，漁撈の目的も食糧獲得に限定した（Newell 1993: 62）。フレーザーやスキーナ川のように，20 世紀半ば以後サケ資源の減少が深刻化した地域では，ストックの保全（かつサケ漁業の優先）のため，その地域に住む先住民の漁撈が完全に禁止されたこともあった（Newell 1993: 88–97, 145–147）。しかしクワクワカワクゥの住むバンクーバー島北部においては，漁撈をおこなうにあたり，これら一連の漁撈政策がフレーザーやスキーナ川周辺ほど障害にはならなかった。たしかに，ニムキッシュ川（Nimpkish，おもにアラート・ベイの人々が依存していたベニザケの遡上するバンクーバー島北東部の河川）におけるベニザケは激減し，また河川の中流もしくは上流での堰や簗を使った伝統的な漁法を放棄しなければならなかったが，それでも人々は河口や海浜でフレーザー川に遡上するベニザケをとることができたからである（さらにその他の種のサケは豊富であった）。また，政府の反漁撈政策の大きな標的になったのはフレーザーやスキーナ川などの比較的大きな河川における漁撈であって，バンクーバー島のように大きな河川がない地域における漁撈は比較的世論の非難から逃れることができた。

先住民の漁撈に対する抑圧的な政策に転機が訪れたのは，1990 年に結審したスパロー（Sparrow）判決以後であった。この判決では，先住民の漁撈は資源保護に次ぐ優先順位を与えられる――つまりサケ漁業やスポーツ・フィッシングより優遇される――ことが明言された。さらにその 2 年後に先住民漁業戦略（Aboriginal Fisheries Strategies）が発表されたことにより，先住民による漁撈と漁業操業は政策において推進されることになった。

2.3　現代の漁業漁師の位置づけ

筆者の知る限り，クワクワカワクゥ社会におけるサケ漁業漁師の人口比率に関する統計資料は存在しない。しかし以下に示すように，人口比の推移に関するある程度の推察は可能である。

前項で述べたように，1880 年代から 20 世紀前半にかけて，リクルーターたちは自身と血縁，地縁を通して結びつく人口をまとめて雇用する傾向があった。したがって，当時はほぼすべての就労可能な男性が漁師（そして女性が工場労働者）であったと考えられる。また，デービス・プランが実施されるようになった 1960 年代に入っても，ギルフォード島（クワクワカワクゥのテリトリーの一部）の成人男性の 4 人に 3 人が漁師であったというローナーのアンケート調査（Rohner 1967: 41）が示すよう

に，依然として漁師人口比の高かったことが窺える。さらにAによれば，1990年代初頭においてさえ，ゆうに半数以上の就労可能な男性が漁業――おもにサケ漁業――に携わる「漁業漁師」（commercial fisherman）であった。つまり，漁業漁師の人口比は年々減少しているものの，クワクワカワクゥ社会は近年にいたるまで文字通りの漁民コミュニティだったのである。

しかし1990年代後半に入ると，漁業漁師人口は就労可能な男性の3割弱くらい[6]にまで一気に減少することになる。この背景には，第一にサケのストックが激減したという事実がある[7]。とくにフレーザー川に遡上するベニザケの1990年代後半における著しい減少は，サケ漁業およびこの産業と関わりを持つ漁業漁師たちの双方に打撃を与えている。サケ漁業が発足して州の一大産業に成長して以来，5種のサケのなかでもベニザケの市場価値は一貫して高いものであった（Knight 1996: 180）。なかでも「フレーザー・ソックアイ」（フレーザー川のベニザケ）は，現在の国際的なサケ市場において最高級ブランドだと認識されるほどである。フレーザー川のベニザケの減少は，それ故にサケ漁業という産業の存続に多大な影響を与える事件なのである。他方で漁業操業をフレーザー川のベニザケに依存していた大半のクワクワカワクゥ漁業漁師にとっても，この事件は漁獲ひいては収入の減少をもたらした。漁業の操業をおこなうには，ライセンスの取得，漁具・漁船の維持などに多額の費用がかかる。そのため，ベニザケの減少によりそれらの経費を負担するのが困難になった経済力に乏しい漁師たちは廃業せざるを得なくなり，Aのようにフレーザー川のベニザケを捕獲できる南部[8]だけでなく，ナス川（注7参照）やスキーナ川のベニザケを捕獲できる北部のライセンスも所持できるほど経済的に恵まれた漁師だけが生き残ることができた。

漁師人口の減少を導くもう1つの要因は，1996年から実施されているカナダ漁業海洋省による「サケ・ライセンスの自発的放棄プログラム」（Voluntary Salmon License Retirement Program）である。このプログラムの意図は，漁船ごとに発行されるサケ漁業ライセンスを払い戻して操業者を減らし，それによってストックの減少を最低限にとどめ，かつ残った操業者たちがより効果的に捕獲できる環境を整えることにある。同省によれば，この政策が実施されてから3年で約1,400隻分のライセンスが放棄され，操業者数はほぼ半減した（Canada 2000: 16）。同省からライセンスの払い戻しの打診を受けたAによると，彼に提示されたライセンスの払い戻し額は1隻（まき網漁船）につき約400,000ドルであった。後述するが，これはまき網漁船の船長にとって約8から9年分の収入額に相当する。それ故，当初まったくライセンスを売る

気のなかったAも一瞬売却を考えたという。結果的にAはライセンスの放棄を拒んだが，その一方でライセンスを放棄した船長も相当数いたのである。

サケ漁業のライセンスを放棄した船長のなかには，同時に漁船を売却した者も多数いた。先述の通り，多くの漁業漁師はサケだけでなく，サケと同じ漁法で捕獲できるニシンも商業的に捕獲していたから，ライセンスと同時に漁船を放棄した多くの人々は同時にニシン漁業からも退かざるを得なくなった。

まき網では，1つのライセンスの放棄が最低5人の漁師の失職を意味する（3.2参照）。こうしてクワクワカワクゥの漁業漁師の人口は3割弱程度にまで激減したが，この減少傾向は居住地域で均等に見られるわけではない。漁師人口比率には地域ごとに大きな差があり，たとえば先述した3つの市町村では，キャンベル・リバー地域に住むほとんどの成人男性が今でも漁師であるのに対し[9]，他の2つの地域では多くの男性が漁業から退いた。Aによれば，アラート・ベイでの漁師人口の減少はとくに著しく，ほとんどの男性が漁業から撤退したらしい[10]。

こうした漁業漁師人口の減少に伴い，実質上漁師のカテゴリーは2つに分けられることとなった。つまり，漁業（と漁撈）に従事する漁業漁師と，漁業ライセンスを放棄し，いまや漁撈しかおこなえなくなった「生業漁師」（food fisherman）である。ただし，後者のなかにはライセンスと同時に漁船を売却した者もいるので，必ずしもすべての海産資源を捕獲できるわけではない。それらの人々は，漁船を利用しなければ捕獲できないサケ，オヒョウなどの漁撈はせず，潮干狩りでハマグリを獲るか，ドックから罠を垂らしてエビやカニを獲るしかないのである。

本稿の依拠するデータがおもに漁業漁師であるAとその親戚の経済活動の参与観察に基づく以上，本稿で記述される「クワクワカワクゥの経済活動」とは，厳密にはクワクワカワクゥ社会で約3割程度にまで減少した漁業漁師のそれに限定される。しかし本稿の議論は，漁業をすでに引退してしまった生業漁師たちにとってまったく無関係だというわけではない。これらの生業漁師（つまり元漁業漁師）は，かつて漁業に従事し，そこで漁の技能や漁師固有の道徳律を培ってきた者として，みずから潜在的な漁業漁師だと自負しているからである。他方で現役の漁業漁師も，現にAが2000年急遽不足したクルーを補う目的ですでに引退した友人を呼び寄せている例（5.3参照）に窺えるように，生業漁師たちを補欠的な漁業漁師とみなしているのである。

2.4　年間の活動パターン

以下に提示するクワクワカワクゥ漁師の1年の生活記録は，筆者が2000年の調査時にAや彼とともに活動するまき網漁師たちに同行して観察したものである（図1）。漁業と漁撈活動において，Aは彼の弟たちが船長を務める他のまき網漁船3隻とともに，つねに4隻からなる船団を構成して，互いに近接した空間において操業する（ただし操業は各漁船が独自におこなう）。彼らまき網漁師にとって，1年の生活はニシンとサケを対象とした2度の漁業シーズンを軸に営まれる。以下，ニシン漁業シーズンの記述から概説する。

毎年2月末になると，ニシン漁業のための準備が開始される。Aなど各漁船の船長たちは，親戚関係にある男性たちに電話をかけ，クルー登録の確認をとる。登録された男性たちは，シーズンの開始前に漁業会社に赴き，ニシン漁に必要な漁網やポンプを漁船に搭載する。

3月に入るとニシン漁業シーズンが始まる。ニシン漁業のオープニング[11]は，3月2日の「湾（Gulf）」と呼ばれる海域――バンクーバー島東岸中部，ホーンビー島周辺――でおこなわれたものと，16日の「ベラ・ベラ（Bella Bella）」と呼ばれる海域でおこなわれたものの2回があった（地図2）。これら2回のオープニングでAが実際に操業したのは，各1日であった。ただし，キャンベル・リバーから両海域までの距離が違う以上，それぞれのオープニングではフィッシングトリップ（出航し，漁をおこなってから帰港するまでの行程）に費やされる日数に差が生じる。1回目のオープニングで漁場となった「湾」は，キャンベル・リバーからもニシンを水揚げするスティーブストン（Steveston，フレーザー川流域にある町）からも近く，それ故フィッシングトリップにもわずか3日が費やされただけで済んだのに対し，より遠方の「ベ

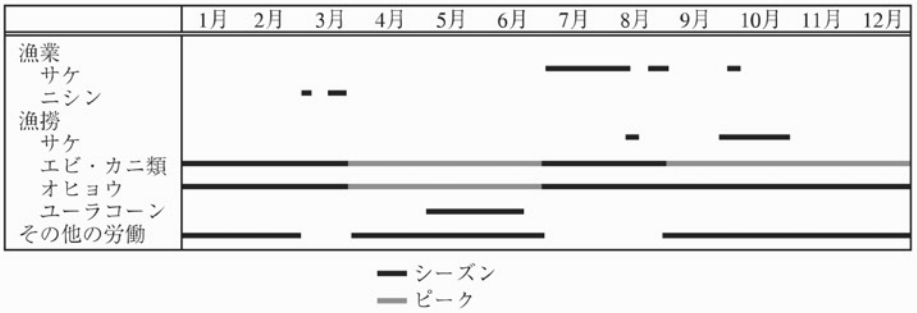
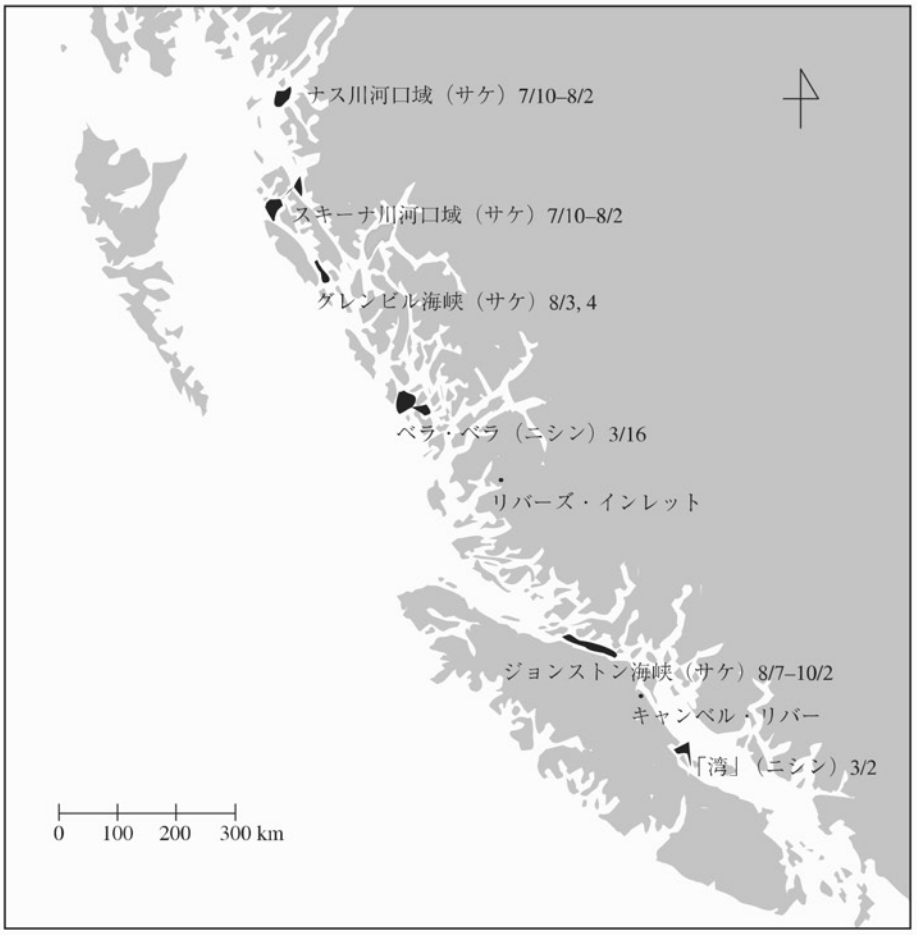


図1　現代のクワクワカワクゥの経済生活



地図2　北西海岸と漁業上の日程・場所

ラ・ベラ」へのフィッシングトリップには6日も費やされた。この2回を合わせ，ニシン漁業では実質の操業に2日間，フィッシングトリップ全体に9日間が費やされたことになる。

ニシン漁業が終わる3月末から6月下旬まではいわゆるオフシーズンであり，漁師たちの活動はさまざまである。彫刻の才がある者は，仮面やトーテムポール，カヌーの製作に従事する。ある者はクルーザーのナビゲーターとして収入を得る。しかし現在もっとも多いパートタイムの職業は，タイセイヨウサケの養殖場における労働である。かつてこの労働は船長以外の若いクルーだけに担われていたが，2000年以降，養殖場側が漁船を利用した業務を用意したことにより，船長たちも一般クルーとは異

なる形で養殖場労働に従事することになった。これらの賃金労働以外では，この時期にはオヒョウ，ユーラコーン（北太平洋産キュウリウオ科の食用魚，eulachon, oolachen などと表記），カニ，エビを対象とした漁撈がおこなわれる。

毎年 7 月初旬からサケ漁業のシーズンとなる。2000 年の場合，A らは 7 月 4 日の夜にキャンベル・リバーを出航し，漁具を搭載してから 7 月 10 日の北部のオープニング初日までにスキーナ川河口周辺に到着した（以下，地図 2 参照）。以後，7 月中は北部のナス川とスキーナ川河口周辺に滞在し，基本的に「2 日操業―2 日休息」というサイクルを繰り返した。8 月になると，北部でベニザケが期待できなくなる上に南部でのオープニングが近くなるため，A は徐々に南下をはじめる。そして 8 月 3 日と 4 日には，南下航路にあるグレンビル海峡でカラフトマス漁業をおこなった。そして南部でのオープニング日が 7，8 日だと発表されるや，ジョンストン海峡に移動し，この 2 日間ベニザケ漁業をおこなった。これが終わると，次のオープニングまで約 1 週間あるので，A らは一度キャンベル・リバーに帰港した（キャンベル・リバーからジョンストン海峡上の漁場までは 3 時間で行き来できる）。オープニングはまだ続くが，以降は水揚げ額の高いベニザケの捕獲が期待できなくなるため，ここで年内の操業を終える漁船もある。

帰港日の翌日にあたる 8 月 10 日，A らは同じくジョンストン海峡で，今度はベニザケ漁撈をおこなった。漁撈においてはあらかじめ捕獲される量が決められている。A が属すヌマイムの場合，船団の船長たちは彼らのヌマイムの世襲首長に 1,200 尾のベニザケを捕獲するよう指示されていた（このヌマイムの人口は約 300，首長は彼らの父である）。そして A らは船団を率いてわずか数回の投網で予定量を捕獲し（各漁船 300，合計 1,200 尾），その日のうちに帰港した。

8 月 15，16 日はふたたび漁業のオープニングである。この頃にはフレーザー川のベニザケがジョンストン海峡を通過しなくなるため，対象はもっぱらカラフトマスとなる。A らは 16 日の午後 9 時まで操業し，翌朝水揚げした後に帰港した。さらにその 1 週間後となる 22 日のオープニングにも，A らはジョンストン海峡でカラフトマス漁業をおこなった。しかしこの操業では漁獲がないに等しかったため，翌 23 日のオープニングには操業せずに帰港した。この後 10 月 2 日のオープニングでシロザケ漁業をおこなって，A らは漁業シーズンを終えた。7 月 4 日にキャンベル・リバーを出航してから 10 月 2 日のシロザケ漁業まで，サケ漁業のための実質操業日数は 22 日間，フィッシングトリップは合計 47 日間となった。

10 月 30 日，同じくジョンストン海峡において A らはシロザケを対象に漁撈をおこ

なった。ベニザケの時と同様，Aのヌマイムの世襲首長が予定量を1,200尾と決めていた。そしてAは船団を率いて，数回の投網で予定量を確保し，その日のうちに帰港した。

他方，8月23日以後は漁業操業に携わる日数が急激に減少するため，彼らはオープニング以外の日にはオフシーズンの労働に戻っている。つまり，彫刻家は仮面などをつくり，養殖場で働く者は養殖場へ戻る。船長らもまた養殖場労働を再開し，漁業オープニングのときだけ漁船を操業する。また，秋にはハマグリ採集，エビ，カニ，ニシンを対象とした漁撈がおこなわれ，かつ松茸採集によって臨時の現金収入が得られることもある。こうしてクリスマスから正月にかけての「クリスマス休暇」の期間をのぞき，人々はオフシーズンの活動に従事し，2月になるとふたたびニシン漁業の準備にとりかかるのである。

3　漁業

3.1　漁法

現在ほとんどのクワクワカワクゥの漁業漁師にとって，商業捕獲の対象はニシンとサケである。ただし後者のうちギンザケとマスノスケは，ストックの激減のため禁漁になっている。また，サケの稚魚の棲息地を保護する目的から，ニシンだけでなくサケの捕獲も海域でしか認められていない。漁法としては，刺し網，まき網のほか，サケに限りトロールが許可されている。

筆者はまき網漁船に乗船したため，ここではまき網の行程を紹介する。北西海岸のまき網は，漁船のほかに1艘のスキフ（小型ボート）を利用する。投網時には，スキフに漁網の一方の端を結び，スキフを固定した上で，漁船が直進することで漁網を拡げる。そして約20分放置した後に漁船を旋回させ，網の上辺を円状に閉じて魚群を囲い込む。あとは網の底を巾着状に持ち上げつつ閉じ込んで，網内の魚を漁船の甲板にあげていく。

ただし，同じまき網とはいえ，ニシンとサケでは漁具とその他の装備や操業行程に多少の違いがある。ニシンの場合，まず体長が小さいので目の多い（細かい）漁網が使用される。また，魚群探知機を使って一度に大きな魚群を囲い込むため，1回の投網で数十トンから100トンのニシンを獲ることができる。したがって，1日の労働は，朝に魚群探知機で見つけたニシン群を捕らえるために一度だけ投網し，あとはポ